

極真カラテ
世界大会迫る!
日の丸を背負い
覚悟を持って
戦った男たち
PART 2
そこに
極真魂を見た!

極真会館・第4回世界大会3位&第5回世界大会2位

増田 章

「我々は世界大会を高め続ける
仕事をしなければならない」

過去4度の世界大会に出場し、優勝にこそ到達できなかったものの、数多の強豪外国人選手と死闘を繰り広げ、また彼らを撃破し、王座死守が至上命題だった日本に勇気と希望を与えた増田章。“無冠の帝王”と呼ばれた彼が、どんな気持ちで世界大会を戦ったのか、そして日本代表として世界大会を戦った者としての今後やるべき使命とは――

取材・文・撮影_舟橋賢
text&photo=Ken Funahashi
写真協力_小林洋
photo=Yow Kobayashi

Akira Masuda

1962年5月22日、石川県金沢市出身
1984年第3回世界大会出場(4回戦進出)
1987年第4回世界大会3位
1990年第22回全日本大会優勝
1991年5月、百人組手完遂
1991年第5回世界大会2位
1996年第6回世界大会5位(新極真会)
IBMA極真会館増田道場主席師範

増田章を、無冠の帝王、という者もいる。確かに圧倒的な実力を持ちながら、常に世界の頂点を前に苦杯を舐め、遠くを見る瞳が天井からのライトに照らし出される姿ばかりが印象に残っている気がする。

世界大会に出場すること4回。過去に戦った相手は、三瓶啓二、大西靖人、松井章奎、七戸康博、緑健児、八巻建志、数見肇、塚本徳臣、アンディ・フグ、ミッシェル・ウエーデル、ジェラルド・ゴルドー、マイケル・トンブソン、ステファン・タキワ、ジャン・リビエール……。まさに歴史に名を残す国内外のトップファイターたちはかりだ。

過去の世界大会を振り返って、増田は今、なにを思うのか? また世界の頂点を追い求める中で、艱難辛苦を乗り越え見えてきたものとはなになのだらうか?

増田が初めて出場したのは、1984年1月に開催された第3回世界大会だった。2年前の第13回全日本では、その前年の全日本チャンピオンにして第2回世界大会準優勝の三瓶啓二と再延長にも及ぶ接戦を演じ、本大会でも活躍が期待されていた。

第1回、第2回大会で旋風を巻き起こしたアメリカ勢に変わり、欧州南米勢が台頭し、選手達の技術も一気に向上。相手のスタイルも大陸別に異なっていたため、日本人選手たちはまだ見ぬ技術との戦いを強いられ、どこかの新聞が、雪降る武道館を血に染めて、と報じたように、激戦が繰り広げられた。

3回戦で増田は、ハンス・ラングレン(ドルフ・ラングレン)が活躍していた時代に、欧州最強の男、と言われていたオランダのミッシェル・ウエーテルと衝突した。

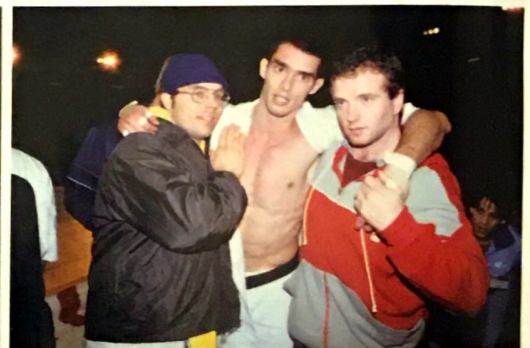
「絶対に優勝しない」との気持ちで臨んだ第4回世界大会は、準決勝のアンディ・フグ戦を以て連戦に連戦しながら延長で惜敗し、3位で終戦を迎える。



第4回世界大会準決勝でアンディ・フグと対戦。「当時のアンディ選手の戦術は画期的」(増田)と語り、「選手時代に下段で一番効かされたのはアンディ選手だった」という。



第4回大会で優勝した松井章彦、準優勝のアンディと表彰台上に並ぶ。「好敵手」松井はこの大会を最後に現役を引退し、増田は第5回を目指していく。



第3回大会3回戦で戦ったミッシェル・ウェーデル(写真中央)。増田自身、「本当に死闘で、人生で最高の試合」と語る。

「ミッシェル選手の突きはまさにこれまでで経験したことがない切れと威力がありました。みぞおちを狙う突きではなく、レバーを狙う突きでした。本戦で彼のレバー打ちを喰らい、息ができないほどの苦しい状態でした。しかし、みづともない負け方ができるかという思いで必死に我慢しました。おそらく僕以外の選手なら、一本負けしていたでしょう。」

僕はその試合、本戦で僕の負けだと考えています。同時に僕は、この試合以外、負けと思う試合はありません。その試合は審判が判定で引き分けにしてくれたおかげで、延長戦を2回戦いました。

僕にとって死闘と言えるのはミッシェル戦のみです。ですが、これは僕の人生で最高の試合です。この試合を肉眼で見た人なら分かりますが、

選手時代、下段廻し蹴りで効かされたのはアンディ。
一撃の威力なら大西さん、アンディの下段は相手のスペース(隙)を狙う正確さがあった。

の力があつたと思います。その下段廻し蹴りは、極真史上、3本指に入るほどの威力だつたと思います」

両者の勝負は、3回の延長を経てのスプリットデシジョン。最後に主審の手は大西を指した。

「なぜ俺の負けなんだ!? 次の世界大会では絶対に優勝しかない」と思ったという。

増田は、第3回世界大会後の11月に開催された第17回全日本大会で八巻建志、緑健児、松井章奎と後に世界チャンピオンとなる3人と戦っている。

「振り返れば、僕にとつての好敵手は松井氏でした。第14回全日本では止めの直前、場外際の攻防で松井選手の後ろ廻し蹴りをテンブルにもらつて危うく倒れかけた経験から、第17回の大会では、隙を作らないように意識していました。彼とは合計3回戦っています。彼は馬鹿正直な僕に、意地悪く、お前には隙がある、といつも教えてくれるような存在でした」

1987年、前年の第18回全日本で準優勝を果たした増田は、第4回世界大会に王者・松井と並ぶ優勝候補としての出場となった。

「この大会時、大会初日で対戦相手のヒジを蹴つてしまい、左脛が肉離れを起こし歩くのが精一杯な状態でした。4回戦のジェラルド・ゴールド1戦では、試合巧者で196cmの長身で懐が深く、とても戦いにくかつたのを覚えています。早く決着をつけたかったのですが2回の延長戦を戦いました。そして準決勝のアンディ・フグ戦は脚が思うように動かず大変でした。アンディ選手の戦術は当時画期的でした。僕に事前に情報があれば、彼の戦術を上手く封じ込

められたはずですが、ただ、彼とは後に親しい友人となりました」

本戦は増田が完全に勝っていた。ただ、極真空手が世界へと広がる中、諸外国からもホームタウンデンジョンに対する目が厳しくなっていた。準決勝であれば勝負をハッキリさせた方が良くもされない。もう一度やらせても大丈夫だろう。日本人の審判はそんな気持ちでいたのかもしれない。

「延長に入つて、アンディ選手の下段蹴りが効いてきました。脚のケガで脛受けが十分にできなかったこと、また主審の、止め、のあとにアンディ選手に一度、ノーガードのところを思い切り蹴られていて、これが効いていました。」

僕の選手時代、下段廻し蹴りで一番効かされたのはアンディ選手でした。一撃の威力なら大西さんの方が上だと思えます。でもアンディ選手の下段廻し蹴りには、相手のスペース(隙)を狙う正確さがありました。

第4回世界大会では日本人、外国人のトップ選手らがアンディ選手の下段蹴りで技有りを奪われていますが、彼らは1カ月もしたら回復していたと思えます。僕は数カ月間もダメージが残りました。でも、この試合では絶対に技有りを取られたくありませんでした」

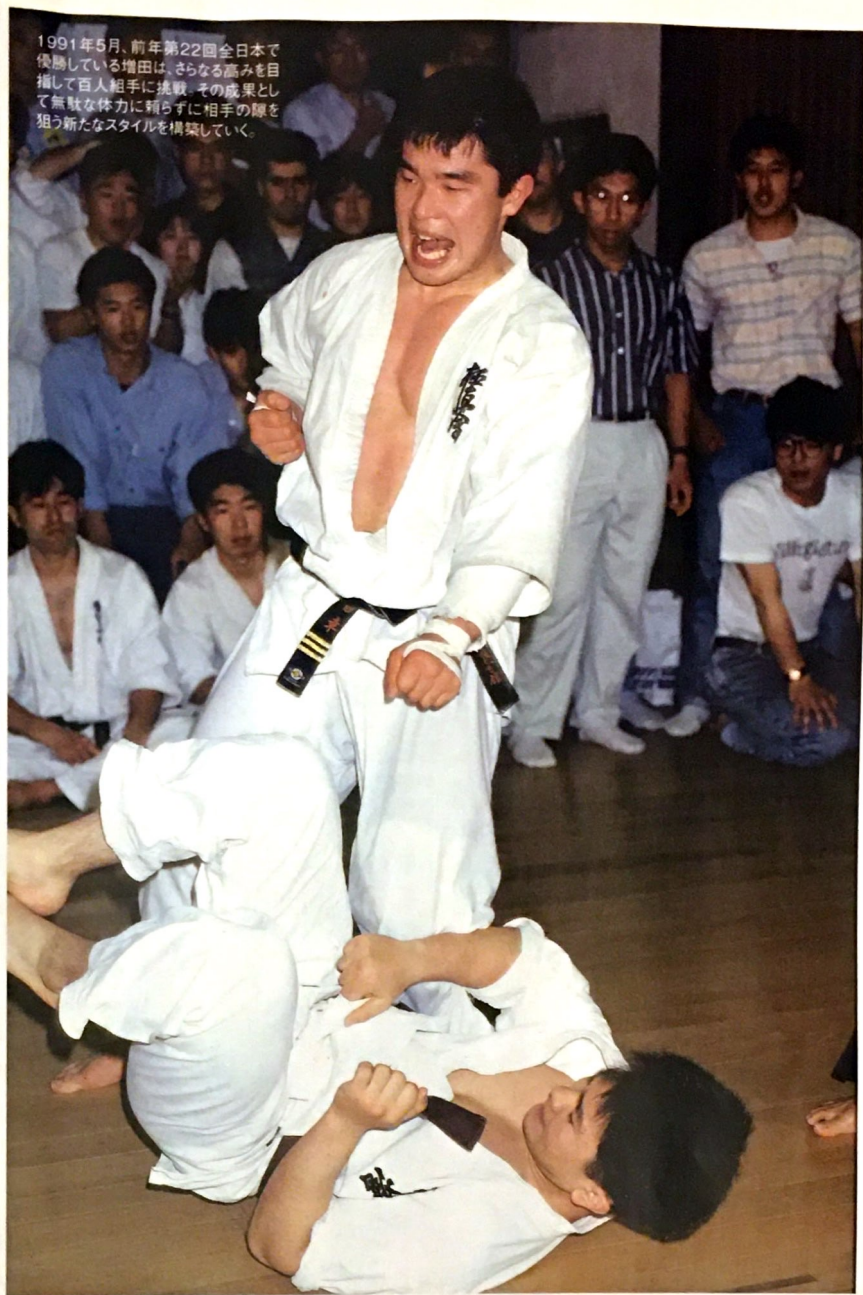
増田の第4回世界大会は、3位という結果で終わった。そこから第5回世界大会までの3年間、増田は想いと現実の狭間でしがきながら3度目の世界の頂点を目指していく。

第20回、第21回全日本で思うような結果を残せなかった増田は、第22回全日本でひとつの開眼を得た。

苦境の中、フィジカルトレーニングで身体を仕上げる一方で、「必ず



第5回世界大会準決勝で約40kg体重差のある「巨鯨」ジャン・リビエールにダメージを負わせて完勝。この試合で「自分の相手理論の結実を見た」と増田。



1991年5月、前年第22回全日本で優勝している増田は、さらなる高みを目指して百人相手に挑戦。その成果として無駄な体力に頼らずに相手の隙を狙う新たなスタイルを構築していく。

優勝する」と高ぶり続けていた気持ち、「自分に勝つ」へと変わり、力で相手を叩きつぶしてきた組手が相手の動きに合わせた相手に変わっていた。

決勝戦の相手は緑健児。2回目の延長戦で、右の上段廻し蹴りによる技有りを奪い初優勝。無冠の帝王、と言われ続けた男が、ついに日本の頂点へと輝いた。

「決勝のあの上段廻し蹴りは、大会前から戦術を練り、準備をしていました。具体的には、緑選手が下突きにきたら、ブロックして上段廻し蹴りで倒すという戦術です。それが功を奏して勝ただけです」

40kg以上重い相手にダメージを与えた戦い、百人組手による「応じ」理論の萌芽が結実

優勝する」と高ぶり続けていた気持ち、「自分に勝つ」へと変わり、力で相手を叩きつぶしてきた組手が相手の動きに合わせた相手に変わっていた。

決勝戦の相手は緑健児。2回目の延長戦で、右の上段廻し蹴りによる技有りを奪い初優勝。無冠の帝王、と言われ続けた男が、ついに日本の頂点へと輝いた。

「決勝のあの上段廻し蹴りは、大会前から戦術を練り、準備をしていました。具体的には、緑選手が下突きにきたら、ブロックして上段廻し蹴りで倒すという戦術です。それが功を奏して勝ただけです」

第5回世界大会は、これまでと違い全日本チャンピオンとしての出場となった。そんな増田が至った境地は心技体の一体化という境地であった。そして、そのための修行として百人組手を行った。だが、その荒行が世界大会で思わぬ答えを導き出した。

「百人組手終了翌日、あまりに具合が悪く、急性腎不全となりました。緊急入院し、1カ月の間、ずっと病院のベッドの上での生活が続きました。正直、半年後の世界大会も諦めなければならぬほどの状態でした。入院後は寝たきりで、体力も筋肉も落ちました。それでも僕は、世界大会を諦めきれませんでした。このまま入院していると大会に出場できなくなるので退院させてくれ、と頼んで病院を出ました。

退院後の1週間はまともに歩けませんでした。少しずつ動き始め、数週間後に道場で稽古を始めたときは、組手のステップを踏んだだけで息切れとめまいがしました。体重も10kg減っていました。正直、普通なら大会は無理だったでしょう。

大会時は、血液成分が健常時よりヘモグロビン量が20%、筋力も20パーセント減少しました。それでも気力だけは充実していました。

そんな中、新たな組手スタイルが見えてきました。体力に自信がない分、体力を無駄使わず、相手の動きを見切り、わずかな隙を突いて技と力を集中させる戦い方です。第5回世界大会では、そのような組手スタイルで勝ち上がっていくことができました」

大会3日目の4回戦、5回戦では、強豪外国人選手に対し共に一本勝ち。準々決勝でも、3年前の第20回全日本準優勝者の石井豊に本戦で判定勝ちを決めた。大一番となった準決勝の相手は身長188cm、体重128kgのカナダ選手権優勝者ジャン・リビエールだった。

「リビエール選手の巨体とそこからの攻撃は脅威でしたが、隙がありました。僕は、相手の攻撃をかわしながら下段蹴りとレバーへのカウンターの突きで相手にダメージを与える戦術を実行しました。試合後、彼は「脚のダメージが酷いので3位決定戦を戦いたくない」と言ったそうです。体重差40kg以上の相手からダメージを受けることなく、逆に相手の隙を狙った攻撃で相手にダメージを与えた戦いは、自分の相手理論の「応じ」の結実でした。百人組手による「応じ」理論の萌芽が結実したのです」

そして、決勝戦で待っていたのは、前年の全日本で決勝を争った緑健児。「決勝では、僕は十分勝機があると思っていましたし、最後まで一本勝ちを狙っていました。相手に攻めさせて、緑選手がガードを下げたときに上段廻し蹴りで倒そうと思っていました。ただ、延長戦で狙い澄まして出した上段蹴りは、相手の頭の上部をかすただけで終わり、緑選手もそれを機に戦い方を変えてしまったため、一本勝ちのチャンスを逸してしまいました。

試合後、世界一に向かってガムシヤラに攻め続ければ勝つたのでは？という声も聞きましたが、私は一本勝ちしか考えていませんでした。スタミナに自信がなかったのと、審判を信じるのができなかった」

再延長まで判定は引き分け。体重判定で15kg軽く、試験的に1枚勝っていた緑健児が世界チャンピオンに

なった。
「第5回世界大会後は、色々ありました。もう一回やるしかないな、という気持ちに至りました」

増田はその後、大山総裁存命中の第24回全日本に出場し、3回戦で数見肇と対戦し、試割り判定で敗退。第25回、26回全日本はケ方で欠場した。

そんな中、1994年4月26日に大山倍達総裁が逝去。95年4月に極真会館に組織的混乱が訪れる。支部長協議会派（現新極真会）は、1995年11月に開催された極真会館（松井章奎館長）の第6回世界大会から2カ月後の、1996年1月に第6回世界大会を開催した。

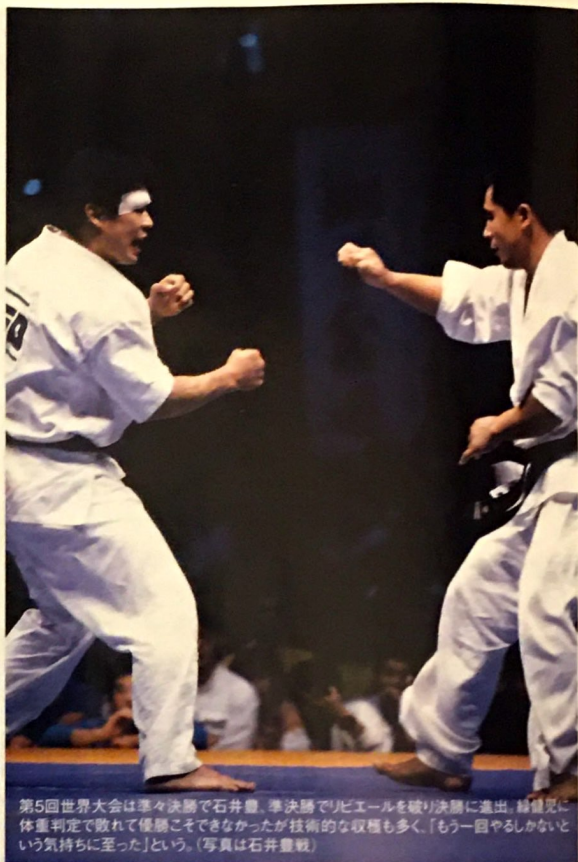
「僕は協議会派の先頭に立って世界中を回っていました。しかし、組織のゴタゴタと大山先生の不在でモチベーションが弱まり、かつ疲労困憊でした。しかし、無理をして出て良かったと思っています。なぜなら10歳ぐらい年下の塚本（徳臣）選手と戦えたからです。思えば、全てはあげませんが、三瓶、松井、大西、緑八巻、七戸、ウエーデル、ゴルドー、アンディ、トンブソン、リビエール、みんな素晴らしい選手たちでした。今思えば、とても楽しかった」

振り返れば、数見戦、塚本戦などいつまでも記憶に残る試合であり、相手にとって増田との戦いは、若き才能を開花させた試合でもあった。

過去4回の世界大会を振り返って増田は今、何を思うのか？

「あの頃、空手母国日本を守れ、というキャッチフレーズの元、僕らは世界大会を戦いました。」

しかし、あの頃の僕にそんな思いはありませんでした。オリンピックく選手たちのように国のために金メ



第5回世界大会は準々決勝で石井章、準決勝でリビエールを破り決勝に進出。稲見克巳に体重判定で敗れて優勝こそできなかったが技術的な収穫も多く、「もう一回やるしかない」という気持ちに至った」という。（写真は石井章戦）



現在、IBMA 極真会館増田道場主席師範を務める。「拓真武道メソッド」と呼ぶ独自の空手理論を追求しているながら、2015年から極真会館（松井館長）と友好団体となり、極真空手の未来に向けて尽力している。

世界大会はみんなの想いが残る場所、 そのかけがえのない場所で 認められたかった。



ルを獲得するという感覚はありません。僕の中にあつたのは、辛かった少年時代を極真空手と極真会館が救ってくれた。その世界大会という場所でもっと認められたい。そして、極真空手を最高のものとした。正直、ダメなところがあるから。だから僕が世界チャンピオンなのだ、と思っていた。チャンピオンになれなければ、僕の人生は無駄になると思っていました。それは空手母国のためではない、自分のためでした。しかし、今思うのは、空手母国を護るということは重要です。みんなの思いが残る場所だから。だからこそ、チャンピオンになつた者は、心技体の全てに優れ、世界大会という場所を高め続ける仕事をしなければならぬと思っています。でも理想の極真空手を追いかける者たちばかりになつたように思います。百歩譲って、皆が理想を追いかけているというなら、その極真空手が良くなりましたか？と聞きたい。

僕がミッシェルの突きで倒れなかつたのも、アンディの下段蹴りに耐えたのも、そのかけがえのない場所でも認められたかった。幼い頃、ある場所でも「ゴミ」のように扱われたから。今回、覚悟というテーマらしいですが、僕の覚悟とは、どんなことがあっても、どんな結果になっても、僕は僕だ、と胸を張れる生き方をする、ということなんです。ただ、それが年を重ねて家族ができて、様々な人たちに支えられて、自分のために、みんなのために、という生き方が最高のことのように思っています。

もし極真空手がオリンピック種目ならば、国家や宗教、言語、文化などの違いを超え、人々を繋ぐ場所であつたはず。もし、そのような空手だつたら日本のために日本の仲間のために戦う、と僕は言うでしょう。なぜなら、そのような気持ちは、自分を信じるこの大変さに足掻く者に、力と勇気を与え、120パーセントの力を出させてくれると確信するからです。また、そのような戦いは、日本のみならず、他国に人々にも勇気と感動と尊敬をもたらす、極真空手の社会的価値を高めると思うからです。また、先人への報恩になると思います。

僕には後悔があります。それは大山総裁の逝去後、極真会館を良くしたいという気持ちから、極真会館を分裂させてしまったことです。

現在行われているラグビーのワールドカップに勝るとも劣らない加盟国と選手層を有した全盛期の極真会館の世界大会と極真空手の伝統、そして象徴たる世界大会だけは、分裂させるべきではなかった、と今思っています。

本当は世界大会をラグビーのように継承、発展させる道を模索したかった。それができなかったのは、分裂の解決策を見いだせなかった支部長とチャンピオン達に責任があると思っています。その最先鋒だった増田が一番悪いとも思っています。もし、現在も世界大会のチャンピオンの矜持を持って生きている者がいるなら、あの場所の価値に想いを馳せてほしい。

そして、極真空手と極真会館が将来、どのように変わるべきか、もっと知を尽くして想像してほしいと思っています。お前がそんなことを言える立場か、と言われると思うけれど、僕は極真空手を護るために頑張りたい。増田流ですけれどね」